〔B 年〕受難節第 5 主日(2023 年 3 月 26 日)

【旧約聖書日課】哀歌　1章1～14節

1 なにゆえ、独りで座っているのか、
　人に溢れていたこの都が。
やもめとなってしまったのか、
　多くの民の女王であったこの都が。
奴隷となってしまったのか、
　国々の姫君であったこの都が。
2 夜もすがら泣き、頬に涙が流れる。
彼女を愛した人のだれも、今は慰めを与えない。
友は皆、彼女を欺き、ことごとく敵となった。
3 貧苦と重い苦役の末にユダは捕囚となって行き
異国の民の中に座り、憩いは得られず
苦難のはざまに追い詰められてしまった。
4 シオンに上る道は嘆く、
　祭りに集う人がもはやいないのを。
シオンの城門はすべて荒廃し、祭司らは呻く。
シオンの苦しみを、おとめらは悲しむ。
5 シオンの背きは甚だしかった。
主は懲らしめようと、敵がはびこることを許し
苦しめる者らを頭とされた。
彼女の子らはとりことなり、
　苦しめる者らの前を、引かれて行った。
6 栄光はことごとくおとめシオンを去り
その君侯らは野の鹿となった。
青草を求めたが得られず
疲れ果ててなお、追い立てられてゆく。
7 エルサレムは心に留める、
　貧しく放浪の旅に出た日を
いにしえから彼女のものであった、宝物のすべてを。
苦しめる者らの手に落ちた彼女の民を助ける者はない。
絶えゆくさまを見て、彼らは笑っている。
8 エルサレムは罪に罪を重ね
笑いものになった。
恥があばかれたので
重んじてくれた者にも軽んじられる。
彼女は呻きつつ身を引く。
9 衣の裾には汚れが付いている。
彼女は行く末を心に留めなかったのだ。
落ちぶれたさまは驚くばかり。
慰める者はない。
「御覧ください、主よ、わたしの惨めさを、敵の驕りを。」
10 宝物のすべてに敵は手を伸ばした。
彼女は見た、異国の民が聖所を侵すのを。
聖なる集会に連なることを主に禁じられた者らが。
11 彼女の民は皆、パンを求めて呻く。
宝物を食べ物に換えて命をつなごうとする。
「御覧ください、主よ、
　わたしのむさぼるさまを見てください。」
12 道行く人よ、心して目を留めよ、よく見よ。
これほどの痛みがあったろうか。
わたしを責めるこの痛み
主がついに怒ってわたしを懲らすこの痛みほどの。
13 主は高い天から火を送り
わたしの骨に火を下し
足もとに網を投げてわたしを引き倒し
荒廃にまかせ、ひねもす病み衰えさせる。
14 背いたわたしの罪は御手に束ねられ、
　軛とされ、わたしを圧する。
主の軛を首に負わされ、力尽きてわたしは倒れ
刃向かうこともできない敵の手に
　引き渡されてしまった。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙　5章1～10節

1大祭司はすべて人間の中から選ばれ、罪のための供
え物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える
職に任命されています。2大祭司は、自分自身も弱さを
身にまとっているので、無知な人、迷っている人を思い
やることができるのです。3また、その弱さのゆえに、
民のためだけでなく、自分自身のためにも、罪の贖いの
ために供え物を献げねばなりません。4また、この光栄
ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそ
うであったように、神から召されて受けるのです。5同
じようにキリストも、大祭司となる栄誉を御自分で得た
のではなく、
「あなたはわたしの子、
わたしは今日、あなたを産んだ」と言われた方が、それ
をお与えになったのです。
6また、神は他の個所で、
「あなたこそ永遠に、
メルキゼデクと同じような祭司である」と言われていま
す。
7キリストは、肉において生きておられたとき、激し
い叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う
力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態
度のゆえに聞き入れられました。8キリストは御子であ
るにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれ
ました。9そして、完全な者となられたので、御自分に
従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源とな
り、10神からメルキゼデクと同じような大祭司と呼ばれ
たのです。

【福音書日課】ルカによる福音書　20章9～19節

9イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「あ
る人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅
に出た。10収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を納
めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。とこ
ろが、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせ
ないで追い返した。11そこでまた、ほかの僕を送ったが、
農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持た
せないで追い返した。12更に三人目の僕を送ったが、こ
れにも傷を負わせてほうり出した。13そこで、ぶどう園
の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子
を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろ
う。』14農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『こ
れは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産
は我々のものになる。』15そして、息子をぶどう園の外
にほうり出して、殺してしまった。さて、ぶどう園の主
人は農夫たちをどうするだろうか。16戻って来て、この
農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにち
がいない。」彼らはこれを聞いて、「そんなことがあっ
てはなりません」と言った。17イエスは彼らを見つめて
言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味
か。
『家を建てる者の捨てた石、
これが隅の親石となった。』
18その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石
がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしま
う。」19そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエ
スが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと気づ
いたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。

「聖書協会共同訳」（2018年版）読み比べ

哀歌　1章1～14節

1 ああ、民に溢れていた都が
　寂しく座っているとは。
国々の間で偉大であった者が
　やもめのようになるとは。
諸州の女王が苦役に服すとは。

2 彼女は夜通し泣き続け、涙は頬を伝う。
彼女を愛した者の中に、慰める者は誰もいない。
友は皆、彼女を裏切り、敵となった。
3 苦しみと過酷な労役の末に
ユダは捕われの身となった。
諸国民の中に住み
憩いを見いだすことはできない。
追う者たちが皆で彼女を苦境の中に追い詰めたのだ。

4 シオンの道は嘆き悲しむ
定めの祭りに来る者がいないことを。
その城門はすべて荒れ果て、祭司たちは呻き
おとめらは悲しみ、シオンは苦しむ。

5 彼女を苦しめる者が頭となり
敵が栄えている。
背き続けた罪のために
主が彼女を悩ませているのだ。
子どもたちは捕らわれ
苦しめる者の前を歩かされた。

6 娘シオンから輝きはことごとく消え去った。
高官たちは草地を見つけられない鹿のように
追い立てる者の前を力なく歩いて行った。

7 エルサレムは思い出す、苦難と放浪の日々を
かつて持っていた宝のすべてを。
その民が苦しめる者の手に落ちても助ける者はいない。
その破滅を見て、苦しめる者たちは嘲笑う。

8 エルサレムは罪に罪を重ね
汚れた者となった。
彼女をたたえていた者は皆その裸を見て蔑んだ。
彼女もまた呻き声を上げ
恥じて退いた。

9 衣の裾に汚れが付いても
彼女は自分の行く末を思いもしなかった。
驚くほど落ちぶれても、慰める者がいない。
「主よ、私の苦しみをご覧ください。
敵は勝ち誇っています。」

10 苦しめる者は財宝のすべてに手を伸ばす。
異国の民が聖所に入るのを、彼女は確かに見た。
彼らはあなたの集会に加わってはならないと
　命じられていたのに。

11 彼女の民は皆、呻きながらパンを求め
財宝を食べ物に換えて、命をつなごうとした。
「御覧ください、主よ。目を留めてください
　私がどれほど卑しい女に成り果てたかを。」

12 あなたがたは何とも思わないのか。
道行くすべての人よ、見よ、目を留めよ。
これほどの痛みが私に負わされたことが
　あっただろうか。
主は燃える怒りの日に私を苦しめられた。

13 主は高い所から火を送り
それを私の骨に下した。
足元に網を張って私を引き倒し
見捨てられた者、一日中病む者とされた。

14 私の背きの罪が束ねられて軛となった。
御手で編まれて、私の首に掛けられた。
こうして主は私の力を挫き
刃向かうことのできない者たちの手に
　私を引き渡された。

ヘブライ人への手紙　5章1～10節

1大祭司は皆、人々の中から選ばれ、罪のための供え
物やいけにえを献げるよう、人々のために神に仕える務
めに任命されています。2この大祭司は、自分も弱さを
身に負っているので、無知な迷っている人々を思いやる
ことができるのです。3また、その弱さのゆえに、民のた
めだけでなく、自分のためにも、罪のための供え物を献
げねばなりません。4また、この光栄ある務めは、誰も自
分で得るのではなく、アロンのように神に召されて受け
るのです。
5同じようにキリストも、大祭司となるという栄誉を
ご自分で得たのではなく、こう言われた方がお与えになっ
たのです。
「あなたは私の子
私は今日、あなたを生んだ。」
6また、他の個所で、こう言われています。
「あなたこそ永遠に、
メルキゼデクに連なる祭司である。」
7キリストは、人として生きておられたとき、深く嘆
き、涙を流しながら、自分を死から救うことのできる方
に、祈りと願いとを献げ、その畏れ敬う態度のゆえに聞
き入れられました。8キリストは御子であるにもかかわ
らず、多くの苦しみを通して従順を学ばれました。9そ
して、完全な者とされ、ご自分に従うすべての人々にと
って、永遠の救いの源となり、10神によって、メルキゼ
デクに連なる大祭司と呼ばれたのです。

ルカによる福音書　20章9～19節

9イエスは民衆にこのたとえを話し始められた。「ある
人がぶどう園を造り、これを農夫たちに貸して、長い
旅に出た。10収穫の時になったので、ぶどう園の収穫を
納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。と
ころが、農夫たちはこの僕を袋叩きにして、何も持たせ
ないで追い返した。11そこでまた、別の僕を送ったが、
農夫たちはこの僕も袋叩きにし、侮辱して何も持たせな
いで追い返した。12さらに三人目の僕を送ったが、これ
にも傷を負わせて放り出した。13そこで、ぶどう園の主
人は言った。『どうしようか。私の愛する息子を送ろう。
この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』14しかし、農
夫たちは息子を見て話し合った。『これは跡取りだ。殺
してしまおう。そうすれば、財産はこちらのものだ。』
15そして、息子をぶどう園の外に放り出して、殺してし
まった。さて、ぶどう園の主人は、農夫たちをどうする
だろうか。16戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう
園をほかの人たちに与えるに違いない。」民衆はこれを
聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。
17イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう
書いてあるのは、何のことか。
『家を建てる者の捨てた石
これが隅の親石となった。』
18その石の上に落ちる者は誰でも打ち砕かれ、その石が
落ちて来た者は、押し潰される。」19その時、律法学者
たちと祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこ
のたとえを話されたと気付いたので、イエスを捕えよう
としたが、民衆を恐れた。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・3 月 26 日「受難節第 5 主日」の日課主題は「十字架の勝利」。
・旧約聖書日課は、「哀歌」から、「第一の歌」の前半部。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「大祭司キリスト論」を展開していく最初の論考箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「ぶどう園と農夫のたとえ」の箇所。

旧約日課（哀歌 1 章より）

・「哀歌」は、ユダヤ正典（ヘブライ語聖書）では「諸書」に分類される詩歌集文書で、ユダヤ教の伝統では、「ルツ記」「雅歌」「コヘレトの言葉」「エステル記」と共に「ハメシュ・メギロット（五つの巻物）」と呼ばれる文書群の一つとして扱われる。「ハメシュ・メギロット」は、中世以降のユダヤ教会堂で祭日に決まって読まれてきた文書のまとまりで、「哀歌」はユダヤ暦アブ月 9 日の「ティシャ・ベアヴ」と呼ばれる断食日の朗読文書とされてきた。この断食日は、ユダヤ戦争の結果、紀元 70 年にエルサレム神殿がローマ軍によって破壊されたことを記念して設けられたもので、あわせて、①モーセが出エジプト一年目に約束の地に送った斥候の報告を聞いた民が入植を断念したこと、②前 586 年に当時のエルサレム神殿（ソロモン神殿）がバビロニア王ネブカドネツァル率いる軍隊によって破壊されたこと、③後 133 年に廃墟となっていたエルサレム神殿跡地をローマ皇帝ハドリアヌスが更地にしてユピテル神殿造立計画を進めようとしたこと、④それを端緒として武装蜂起した「バル・コクバの乱」が後 135 年に鎮圧され指導者らが戦死したこと、が記念されてきた。一方、前 2 世紀のマカベア戦争の発端となったシリア王による神殿蹂躙の出来事は別の祭り「ハヌカ」で記念されるばかりでなく、2 世紀以降のラビ文献（「タルムード」など）では一切言及が見られない。紀元前後のユダヤ教共同体の事情が反映しているのだろう。
・「哀歌」は、伝統的に「預言者エレミヤ」に帰され「エレミヤの哀歌」と呼ばれてきたが、これは、前 2 世紀にエジプト・アレクサンドリアで作成されたギリシア語旧約聖書（七十人訳）に付された注釈によるもので、エレミヤに直接結びつく記述は本文中に見られない。
・「哀歌」の文学的特徴に、いわゆる「アルファベット詩」の様式が取られていることが知られている。「哀歌」に収められる 5 つの「詩歌」のうち 4 つが、厳密に「アルファベット詩」の様式で整えられている。すなわち、ヘブライ語アルファベット（22 文字）を順に冒頭に用いる 22 節またはその倍数の様式で作成されている。このような詩作上の技巧が見られるにもかかわらず、著者・編者に関する情報は一切知られていない。一方、内容的特徴である「帰属する国家を失った民の嘆きの歌」は、古代メソポタミアにおいてシュメールやアッカドの時代から知られた文学ジャンルである。

使徒書日課（ヘブライ 5 章より）

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中、「パウロ書簡集」と「公同書簡集」の間に配置されてきた書簡文書。文書末に書簡様式の挨拶文が残されている一方、冒頭にあるはずの挨拶文が欠けており、差出人および宛先が不明となっている。東方教会では「パウロ書簡」の一つに数える伝統もあるが、2 世紀には「パウロ書簡」であることを否定する見解が一般化し、「正典」として広く受け入れられるようになったのは 4 世紀末（398 年カルタゴ会議）になってからである。宛先が記されていないにもかかわらず「ヘブライ人へ…」の書名が付されるようになったのは、2 世紀ラテン教父テルトゥリアヌスが自著で用いたことによる。本書簡の議論が「旧約」に精通していると思われることなどから、ヘブライ人≒ユダヤ人に宛てたものと考えられた。ただし、書名にもかかわらず、本書簡は極めて洗練されたギリシア語で記されていることが当初から多くの教会教父らによって認められており、「ヘブライ語」や「アラム語」を用いるユダヤ人を宛先に想定することは無理がある。
・本書簡の論旨にあるのは、「大祭司＝キリスト」論と呼ばれるキリスト論である。そこでは、「旧約」で示される二つの「大祭司」像が予型として提示されている。第一は、「創世記」アブラハム物語に登場する伝説上の「サレムの王」で「いと高き神の祭司」とも呼ばれる「メルキゼデク」である（創世記 14:18）。この人物の名について、本書簡は 7 章で説明を試みているが、「サレム」は「エルサレム」を指すとされているように、「ゼデク=ツェデク」は、古い時代にエルサレムを支配していた王家の王名として受け継がれていたと考えられている（ヨシュア 10:1 参照）。元来は、ウガリット文献にも見られるカナン祖神のひとつ「ツェデク」に由来する名とされる。
・本書簡の「大祭司=キリスト」論で予型とされる「旧約」の「大祭司」像の第二は、「律法」の祭儀規定でアロンから引き継がれるものとされた「大祭司」で、殊に「レビ記」16 章に規定される「民の贖罪」を年に一回執行する責任を負う者としての「大祭司」である。この「民の贖罪」の儀式は、エルサレム神殿が失われ、「大祭司」職の継承がされなくなった後も、今日に至るまで、「贖罪日（ヨム・キプル）」としてラビ的ユダヤ教共同体の営みの中で引き継がれてきた。「贖罪日」は、毎年 9～10 月頃、「新年祭（ローシュ・ハシャナ）」の終わりに位置づけられ、続く「仮庵祭（スコト）」につなげる「断食日」として、非常に重視されている。
・日課箇所は、この後に展開する「大祭司=キリスト」論の導入部分。イエス・キリストが「大祭司」として神に任じられた根拠として、繰り返し、神に対する「従順（ヒュパコエー）」の態度が示されている。ここでキリストの「御子」性は、この「従順」によるものであるとされており、先在性など実体同質性を前提としていない。
・5 節は「詩編」2:7 から、6 節は同 110:4 からの引用。

福音書日課（ルカ 20 章より）

・日課箇所は、「ぶどう園と農夫のたとえ」として知られ、「共観福音書」が共通して「受難物語」中で伝えている。各福音書間で大きな異同は見られず、概ね一致している。このたとえは、「受難物語」の前半に置かれ、また主イエスに敵対して十字架につけてしまうことになる人々への「当てつけ」であったと説明されていることからも、初代教会で主イエスの十字架死を理由づける根拠を説明するための逸話として位置づけられ、伝承されたものと考えられる。

・このたとえ話は、主イエスのたとえの中では異例ともいえる明瞭な寓喩として解され、「ぶどう園の主人」は「御父である神」、「農夫たち」はユダ・イスラエルの「民（の指導者たち）」、「主人」が送り出す「僕」はイスラエルの「預言者」、「主人の愛する息子」は「御子であるイエス」に相当するものとして解釈することに異論を挟む者はほとんどいない。実際、このたとえ話が語られた場面進行でも、これを聞いた者たちがただちにこれを自分たちに該当する寓喩として理解したものとされている。

・ところで、「マタイ」や「マルコ」がこのたとえ話を文脈上「祭司長、律法学者、長老たち」に向けて主イエスが語った一連の教えとしているのと異なり、「ルカ福音書」は、このたとえ話が「民衆（ラオス=民）」に向けて語られたものであったとしている（9 節）。そして、このたとえ話を聞いた「彼ら＝民衆」の応答として 16 節「そんなことがあってはなりません（メー・ゲノイト）」という反応を描いた上で、以下をイエスが「彼らを見つめて言われた」（17 節）言葉として続けている。ここで「見つめて（エンブレポー）」という用語は、「共観福音書」中で 8 例しか見られないが、多くの用例は、主イエスが不信仰な弟子たちに向けた眼差しを指すものである（マタイ 19:26、マルコ 10:21、同 10:27、同 14:67、ルカ 22:61）。また、「マタイ」は、表現は異なるがペトロの主イエスに対する言葉として「そんなことがあってはなりません（ウー・メー・エスタイ・ソイ・トゥト）」（マタイ 16:22）という趣旨の発言を伝えている。これらの関連から類推すると、「ルカ福音書」は、このたとえ話を、律法学者や祭司長たちに対する当てつけとして受けとめられたものと承知の上で、結局のところ主イエスを裏切る弟子たちをはじめとする人々を「農夫」に当てはめる独自の解釈を示唆しているのかもしれない。

来週の誕生日 （3 月 26 日～4 月 1 日）

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-305 **番「イエスの担った十字架は」**は、現代オランダの牧師で現代語訳詩編歌や讃美歌集編纂にも携わったバルナルトの作詞（独語訳版からの重訳）。曲は、オランダのカトリック司祭シュッターの作曲。

・21-522 **番「キリストにはかえられません」**（＝Ⅱ195）は、20 世紀に入ってから作られた後期福音唱歌の一つ。作詞者レア・ミラーについては不詳。作曲は、自由メソジスト教会牧師の家に生まれた音楽伝道者でビリー・グラハムと共に放送伝道や大衆伝道に従事した G・ビヴァリー・シェーの作曲。

・21-503 **番「ひかりにいます主」**（＝Ⅱ28 番）は、18 世紀ドイツ・ヘルンフート兄弟団の指導者ツィンツェンドルフの原詞（15 節版）を J.ウェスレーが英訳した英語版で広く知られる。曲は、18-19 世紀オーストリアの音楽家プレイエルの原曲を 19 世紀英国の作曲家 W.ガーディナーが編曲したもの。

21-305「イエスの担った十字架は」

Met de boom des levens

1. Met de boom des levens / wegend op zijn rug / droeg de Here Jezus / Gode goede vrucht.

(Re) Kyrie eleison, / wees met ons begaan, / doe ons weer verrijzen / uit de dood vandaan.

2. Laten wij dan bidden / in dit aardse dal, / dat de lieve vrede / ons bewaren zal, *(Re)*
3. Want de aarde vraagt ons / om het zaad des doods, / maar de hemel draagt ons / op de adem Gods. *(Re)*
4. Laten wij God loven, / leven van het licht, / onze val te boven / in een evenwicht, *(Re)*
5. Want de aarde jaagt ons / naar de diepte toe, / maar de hemel draagt ons, / liefde wordt niet moe. (Re)
6. Met de boom des levens / doodzwaar op zijn rug / droeg de Here Jezus / Gode goede vrucht. *(Re)*

21-522「キリストにはかえられません」

I'd rather have Jesus

1. I'd rather have Jesus than silver or gold; / I'd rather be His than have riches untold; / I'd rather have Jesus than houses or lands. / I'd rather be led by His nail pierced hand

[Chorus]

Than to be the king of a vast domain / Or be held in sin's dread sway. / I'd rather have Jesus than anything / This world affords today.

2. I'd rather have Jesus than men's applause; / I'd rather be faithful to His dear cause; / I'd rather have Jesus than worldwide fame. / I'd rather be true to His holy name [Chorus]
3. He's fairer than lilies of rarest bloom; / He's sweeter than honey from out the comb; / He's all that my hungering spirit needs. / I'd rather have Jesus and let Him lead [Chorus]

21-503「ひかりにいます主」

Seelen-Bräutigam

O thou to whose all-searching sight

1. O Thou, to Whose all-searching sight / The darkness shineth as the light, /Search, prove my heart; it pants for Thee; / O burst these bonds, and set it free.
2. Wash out its stains, refine its dross, / Nail my affections to the Cross; / Hallow each thought; let all within / Be clean as Thou, my Lord, art clean.
3. If in this darksome wild I stray, / Be Thou my Light, be Thou my Way; / No foes, no evil need I fear, / If Thou, my Lord, my God, art near.
4. Saviour, where'er Thy steps I see, / Dauntless, untried, I follow Thee; / O let Thy hand support me still, / And lead me to Thy holy hill.
5. If rough and thorny be the way, / My strength proportion to my day; / Till toil and grief and pain shall cease, / Where all is calm, and joy, and peace. / Amen.